5・傅(かしず)かせる幼女

私の手に掛かれば、男一人落とすのなんて容易(たやす)い事よ。そ、本当に簡単なこと。だから特別な事でもなんでもないんだけど……私は早速、ゲットしたその男を翌日店に連れてきた。別にね、連れ回したいとか側に置いときたいとか、そーいう事ではなくて……彼が「私の客」であるとホール長や店のみんなに知らせる必要があったから。ホント、そーいう事情があるだけ。だから別に、新しい客にみんなが「可愛い」とか言っているのを聞くのは、別になんともない。ホントに、だって当然のことだし。ただちょっと癪(しゃく)なのは、店の子たちにちやほやされてるこいつがもー……いい？　君は私の客なんだからさ。もっと堂々としなさいよ。なに顔を真っ赤にして照れてるのよ！

「クランちゃんにも、ちゃんとたお客さんが付いてくれて良かったわぁ」

ホール長……まあいいわ。

ま、これで一通りの手続きは終わったわ。晴れて誠は私専属の「客」として店に認知され、誠はいつでも私を「買う」事が出来るようになる。誠にはもちろん、この店のシステムは当然、私の正体など一切合切を教えてある。流石に鳥の姿を見せてからだったから、私が妖怪だって事もすんなり受け入れたわね。

あー、そうそう。ついでにあいつらにも顔見せしてやらないと。

「あの、彼が「四号」なんですか？　女王たん」

とりあえず私は、持っていたトレイで自称一号の頭を軽快に叩く。

「あんた達と一緒にしないの。この子は私の客だけど、あんた達と同じ変態奴隷とは訳が違うの！」

まず見た目からして全然違うでしょ。私は並んで座っている奴隷達を見渡して溜息をつく。技に走るしか脳のない汗だるま一号。力任せで強引な強面二号。どっちも足りない貧弱V3……なんでコイツだけ三号って名乗らないのかはさておいて……まあ、ビジュアル面だけでも既に天地の差があるって事を自覚しろ、自覚を。

「あの……鳥羽誠です……よろしくお願いします」

「なによ、その反抗的な目は」

誠が奴隷達に頭を下げ挨拶をしているというのに、なんだろうこの態度は。我が奴隷達ながらムカツクわ。すると一号がムスッとした表情のまま、指を指す。その先には、私と誠の腕。なによ、腕を組んでて問題でもあるって言いたいの？

「扱いが違いすぎます……」

ボソボソとV3……ああもう、なんかめんどくさいから三号ね。三号が不満をぶちまけてきた。

「違って当然でしょ？　それくらい判らないのあんた達は」

判らないらしい。いや、判っていても不満なんだろう。三人が三人、眉間にしわを寄せあからさまな態度を取る。

「あっ……そう。なら、もうあんた達いらないわ。契約解除、この店の出入りも禁止ね」

この一言で椅子から即座にどき、床にはいつくばるようひれ伏す奴隷達。まったく、自分達の立場ってものを理解できないのかしらねぇ。ついでに周囲の視線とか……まあ、店員や常連達には見慣れた光景になりつつあるけどね。それはいいとして、そうねぇ……ま、

こいつらの気持ちがわからない私じゃないわ。それなりに「女王たん」してあげてるんだから。
「その程度で許されると思ってるの？　今夜は三人まとめてお仕置きが必要ね」
　三人が上げた顔の、まあなんとも小憎らしいほど笑顔に満ちあふれちゃって……目を輝かせてるこいつらはホント、ドM以外の何者でもないわね。
「誠はどうする？　参考までにこいつらの調教に立ち会ってみる？」
「いや、それはちょっと……」
　苦笑いで拒絶する誠。まあ当然の反応よね。むしろここで「是非！」とか反応されても困るし。
「それに……天道寺さん？　お姉ちゃんがお世話になってるっていう……今日会う約束をしてるから」
　お姉ちゃんという言葉に、奴隷達がすぐさま反応を示すが、私が睨みつけ黙らせる。そう、私は誠に「お姉ちゃん」と呼ぶことを許可してあげた。それが誠の性癖を刺激するんだから、夜のことを考えれば当然よね。
「あの無能保護者と？」
　そういえば、誠の身辺調査を依頼してあったけど……結局無駄になっちゃったわ。本人からたっぷり聞けたし。まあだから、アレは無能で充分だわ。
「無能って……今朝連絡があってね、「こっちの世界」に踏み込む際の注意事項とか、色々話したいことがあるって」
　あー……そうね。一通り私のこととかは話したけど、もうちょっと具体的な話を聞くのは確かに必要か。そーいうの面倒だから、あの保護者に任せた方が確かに楽ね。余談だけど、誠のことは昨夜すぐに連絡したのよ。ゲットしたから調査いらないって。なんか豪快に笑ってたなアイツ……誠とはその時電話口で挨拶させて、連絡先なんかも教えあってたみたい。
「判った。じゃそれ終わるの見計らってアイツの館に顔出すわ。で……あんた達はいつものホテルで部屋を確保して待ってなさい」
　誠はアイツに任せればいいし、こいつらは……ま、昨日たっぷり誠と楽しんだし、適当にあしらってやればいいか。そ、適当にね。私にも女王としての「慈悲」くらい見せてあげないとね、たまにはさ。

「もう準備は良いみたいね」
　私はホテルで大人しく待っていた男達を、全裸のまま正座させ並ばせている。私はと言うと、男達のリクエストに応え「全裸にエロメイド服」という姿。メイド服と言っても、生地はラテックスだし露出度合いから言ってボンテージって方がしっくり来るけど……あくまでメイド服、なんだって。こいつらに言わせるとね。エロメイド服を着た幼女に、調教される。そのシチュエーションがたまらないらしい……まあ、こんなの今に始まった事じゃないから良いんだけど……むしろ色んな衣装をねだられて、最近は悪い気しないのよね……それってちょっとヤバイかな？　まあとりあえず、これくらいのリクエストには「女王たん」として答えてやらないとね。

「なに、もうそんなにしてるの？　毎回毎回、本当に呆れるわ」
三人の肉棒は既にはち切れそうなほど膨張し、天に向かってビクビクとそそり起っている。
「それじゃ、始めて」
私は三人の前に椅子を置き、そこに座った。男達に向け足を広げ、私の秘所が見えるように。そして男達は、自らの手で肉棒をしごき始める。目の前の私を「オカズ」に。
「ふふ……どう？　私のオマンコは」
「はい……ハァハァ……とっても、キレイです」
「いつ見ても、たまりません……」
「ああ、女王たん、女王たん……萌えます、ハァハァ……」
私の問いかけに、荒く息をしながら答える男達。
「相変わらずボキャブラリーの無い……まあいいわ。ちゃんと答えたから、ちょっとご褒美ね」
両手の人差し指で、私は自分の淫唇を軽く広げてみせる。するとどうだろう、男達はより手を激しく動かし始めた。ホント、単純な奴ら。こんなんですぐがんばっちゃうんだから……。
本番前に自慰をさせる。これは最近やるようになった、まあ儀式みたいなものかな。目的は単純に、先に出させて次を長持ちさせるため。私が手や口で抜いてやってもいいんだけど、面倒だし。それにこういった屈辱的な自慰行為をさせる事が彼らにとっては精神的な悦楽なんだから。私としても長く楽しむための下準備ができて、お互いに都合が良いってわけよ。
「必至ねぇ……ほら、頑張りなさい。ご褒美は目の前よ」
更に私は淫唇を広げ、男達を悦楽へ誘(いざな)う。私は別に男達の自慰を見て興奮する事はないけど、まあこれも「女王たん」としてのサービスかな。
「今日は……そうねえ。先に逝った奴から好きなところを舐めさせてあげようかな？」
あはは、更に激しくしごきだしたよこいつら。ちょっとおかしくなっちゃうくらい……そして本当にちょっとだけ、可愛く見えてくるわ。
「く！」
射精大会の一等は、どうやら一号になりそうだ。彼は慌てて立ち上がり、私の元へと駆け寄ってきた。
「相変わらず早いな。早すぎるのは本来……こら、慌てるな！」
椅子ごと私を押し倒そうかという勢い。そして勢い余り、コイツ、あろう事か私の顔めがけ飛ばしてきた。
「あ、す、すみません！」
本来なら、射精は私の口の中にしなければならない。むろん、折角の精気を無駄にしないために。必死に謝る一号だが……。
「まさか、顔射したくてわざとやったのか？」
他意は無かったけど、結果としての顔射に興奮してるのがコイツの焦りようでありありと判る。私は顔に掛かった白濁液を指ですくい、それを口に運ぶ。その様子を見下ろしながら、一号は息を荒くしている。どうしようもない奴だな……これは罰を与えないとね。

「……褒美無し。そこに立ってろ」
普通のＳＭなら、罰も一つのプレイなのだろうが、私はこれをプレイにするつもりなど無い。あえて言うなら放置プレイ？　なんにしても、このようなハプニングを狙うようになっては示しがつかないからね。一号は大人しく、私から少し離れ軍隊よろしく直立した。が、それでも軽く肉棒まで起たせてるんだから……本当にどうしようもない男だよ。
そんなことをしている内に、三号が立ち上がり私の元へとやってくる。興奮しながらも慎重に自分の肉棒を私の口元へと差し出す。私が口を開き軽く亀頭を唇で挟んだとたん、勢いよく喉へ子種がまき散らされた。私は軽く咽せそうになりながらも、喉を鳴らしながらその子供達を飲み込んでいく。
「いいわよ、好きなところを舐めなさい」
真っ先に三号はしゃがみ込み、私の股間に顔を埋めた。まずは舌先で陰核を突く。そしてゆっくり力を入れ初め、すくい取るように舐め上げる。
「んっ……だいぶ上手くなったわね」
私に褒められ気をよくしたのか、三号がしばらく陰核を舌で攻め続けた。まったく、ちょっと褒めたらこれだもの……単純な攻めを繰り返すだけじゃ、技術は向上しないんだけどね。
「はぁ、やっと……」
二号がようやく私の元へとやってきた。三人の中では一番遅漏なんだけど、それでも一般男性よりは早漏かな？　まあ、私の陰部を見ながらの自慰なんだから、早くて当然なんだけどね。
私は二号の精子をたっぷり口に含み、奴に目で合図を送ってやる。すると二号はすぐさま乳頭にむしゃぶりついてきた。唇で小さな乳輪を覆い隠し、舌先で乳輪の先を小刻みに舐め続ける。
「お前もいいぞ……ほら三号、「そこ」だけでいいのか？」
陰核ばかりを舐めていた三号は、舌を僅か下にずらし、より顔を埋め、陰門へと舌を押し入れてきた。クチュクチュと、湿った音が漏れ始める。まったく、言われないとこれだからコイツは……夢中になるのは相手が私だもの、当然といえば当然なんだけど、もうちょっとさ……どうすれば相手が悦ぶのかとか、そういうところに気を回せないのかね。
「いいぞお前達……どうした一号、今にも泣きそうだな」
まったく、叱られて立たされた子供そのものだな。
「ごめんなさい女王たん……もうしませんから、舐めさせてください……」
台詞も子供だな。ただ身体は大人か……肉棒は先ほどよりも張りが出ている。
「しょうがない奴だな……特別に尻を舐めさせてやっても良いぞ」
女王としての慈悲を見せてやる。一号は満面の笑みで礼を言うと、私が座る椅子の下へと素早く潜り込む。正直……そろそろ菊座への刺激が欲しかったところだったのだが、むろんそれを悟られるようなことはしない。これはあくまで、私の慈悲なのだから。女王としての風格は保たねば私の気が済まないし、なによりこいつらががっかりしてしまうからね。
椅子はちょうど尻の部分が空いている作りになっており、私が座ったまま尻を舐められるよう出来ている。とはいえ、直接尻に顔を埋めるには辛く、なかなか奥へ舌が届かない。

周囲をレロレロと舐めるだけに止まっているのがなんともじれったいが……かえって私は興奮してきてしまった。
「……ん、三人とも、上達したわね……だけど、まだまだよ」
軽く喘ぎ声が出そうになるのを、私は抑えた。客にしてやって奴隷として傅(かしず)かせてやったばかりの頃に比べれば、随分と上達はしている。とはいえ、充分ではない。まったくない。まだまだ物足りないけど……こいつらはとにかく、一途な程に懸命だ。それがちょっとだけ、本当にちょっとだけ、かわいげがあるかなと、思う。
良くも悪くも、のめり込みやすいのがオタク。それが良い方向へと向かっていると解釈しているのだが……まあ人間社会に置いて、これが「良い方向」かどうかははなはだ怪しいが。
「なに……もう我慢出来ない？」
私は二号の、先ほど以上に膨張している肉棒をペチッと手で軽く叩いて言った。
「はい……我慢できません。女王たん、そろそろお慈悲を……」
我慢出来ないのは、むしろ私の方。まだまだ未熟だけど、三人がかりで私に肉体的快楽を与え続けているんだからね。
「そうね……まあいいわ。そろそろ入れさせてあげる。でもその前に……ほら、準備なさい」
私の言葉に、三人はすぐさま舌を離し、そして「定位置」に立った。入れさせる前に、私はいつももう一度射精させている。ただし、今度は私の手と足で。陰門を舐めていた二号は股間をこちらに向け寝そべり、肉棒を私の両足に挟まれている。残った二人はそれぞれ私の脇に立たせ、手でしごいてやる。
「攻めるのは上手くなってきたけど、攻められるのは相変わらず弱いわねあなた達」
すぐにでもまた射精しそうなのが、ビクビクと跳ねる脈を直に触れる事でよく判る。
「良いわよ、そのまま出しちゃいなさい」
言われて三回もしごかないうちに、三人はほぼ同時に白濁液を放った。足下で放たれた白濁液は私の股を汚し、手にしていた二本の肉棒から放たれた白濁液は、私の顔に勢いよく降りかかった。むろん今回の顔射は許可済み。私は顔にかかったその白濁液を拭いもせず、口元に掛かったものだけをペロリとなめ取った。その様子を、三人はじっと凝視していた。
「こんな子供に逝かされるなんてね。そしてこんな子供の中に入れたいだなんて……本当に、あなた達って変態よね」
何度も何度も言われ続けている罵倒。それなのに、それだから、彼らは興奮している。
「出したばかりなのに、もう固くして。流石変態ね。いいわ、入れてあげる」
私は肉棒から手を離し、椅子から立ち上がった。寝そべったままの二号に近づき、股を開きまたがる。三度そそり起つ二号の肉棒。それを陰門まで導き、私は一気に腰を落とす。
「んっ！」
思わず、声が出てしまう。そんな私の声に、三人が明らかな反応を示すのはいつもながら見ていて面白い。大人としては平均的なサイズだが、幼女の身体を持つ私には大きい肉棒。既に充分濡れていたとはいえ、キツイ。にも関わらず、私はこれ以上を求めていた。
「さあ、良いわよ……」

二号の上に覆い被さるよう寝そべり、尻を突き出す格好になる私。三号が私の尻、その奥にある孔(あな)にローションを塗る。そしてその手を拭き取る間も惜しみ、ぬめる手で尻を掴み、肉棒を尻にあてがう。

「くっ！」

私は自分の中に、二本の肉棒が差し込まれているのを感じている。ああ、ようやく手に入れた快楽。苦しみながらも、私はこの感触を楽しんだ。

「ほら、動かしなさい」

言われて動く、二人の腰。奴隷としての連携はかなり取れるようになってきた。二人の腰は息を合わせ動かされている。前後の肉棒が同時に押し込まれ、肉棒同士が私の中で肉の壁を隔てぶつかり合う。

「くっ、あっ、いいわよ……ほら、あなたのも……」

残された一号。彼の肉棒を私は招いた。眼前に突きつけられる肉棒。私はそれを手に取り、口へと運んだ。

「んふっ、クチュ……んっ、チュッ……はふぅ……んん」

三点攻め。穴という穴を、私は攻められている。そう、私は攻められている。やっと、私は快楽を受け取る側へと回った。突き入れられる肉棒。擦られる肉棒。かき回す肉棒。三本の肉棒、私によって鍛えられた肉棒が、私に快楽を与えてくれる。当然こいつらも、膣、肛門、口内という天国を味わっているわけだが。

「は、いいわ、もっと激しく、もっと、ん、クチュ、んチュ、はふ……」

狩りで手に入れる男は、非力で私からの快楽を受けるばかり。だけどこの男達は私が育て、私に微力ながら快楽を与えるようになった奴隷達。まるで放牧……モンゴルで行われる放牧。囲いの中で好きにやらせつつ私がコントロールする、そんな放牧。そうして育てた肉棒達が、ここにそろっている。

「いい、いく、そろそろ……ん、んチュ……んん、いく、いくわね、い、いいわよ！」

あくまで逝かせてあげる。その態度を崩してはならない。これからも忠実な奴隷を手元に残しておくのなら、女王であるこの立場を見せつけないと。攻められてはいるが、むろん私も彼らに持てるテクニックを駆使して答えてやっている。締め付け、擦り、舐め上げる。先に二度出していなければ、とっくに根を上げていたはずだ。そう考えると、彼らはまだまだ成長過程か。

つまり……これ以上の快楽も期待できるのか？　そうならば……ふふ、またちょっとだけ、本当にちょっとだけなんだけど、こいつらが僅かながら可愛く見えるわね。

「ん、い、いくのね、さ、い、一緒に、ん、んチュ、んふ……ん、ん、んん！」

脳天に電撃が走る、そんな快感。それは三カ所の穴に白濁液が注がれれた瞬間でもあった。

「ん、はぁ……良かったわよ、あなた達」

私は素直に、三人を褒めてやった。息も絶え絶えながら、恍惚とした表情を浮かべる三人。私は彼らのそんな顔を見て、微笑んだ。

「さあ、次行くわよ。ポジション替えなさい」

恍惚の表情が、多少引きつる。だが、「女王たん」の命令は絶対。三人はお互いの場所を替え待機する。

「そうだ……これは「お仕置き」だったわね」
私の言葉、その意味を理解したのだろう。またしても三人がピクリと反応する。
「あの……女王たん。あまり無理をされては……」
「あら、私が無理をするほど愉しませてくれるのかしら？」
あくまで私を気遣って、という姿勢で説得しようとしたんだろうけど、墓穴よね。
「お仕置きなんだから、つべこべ言わないの。そうね……あんた達の誰か一人が倒れるまで。それくらいで許してあげる」
それじゃ物足りないんだけどね。奴隷達は顔を引きつらせ身を強張らせ、でも肉棒を起たせ息を荒げ、女王への奉仕を続けていく。

「……ずいぶんとまぁ、晴れやかな笑顔だな」
「そう？」
学者先生に聞き返したけど、自覚はしている。たぶん、ついさっきまで愉しんできたから……というのもあるんだろうけど、なんだろうね、我が弟君の顔を見たら、自然と自分の顔が綻んでくのが判った。んー、自分でもちょっと、これほど一人の男に入れ込んでること自体に戸惑いを感じてるんだけど……彼を前にすると、その悩みはすぐに忘れてしまう。まあ、単純に「滅多にない掘り出し物」を手に入れた事への、満足感なんだろうけどさ。
「誠君には色々、「こっち側」のルールとか一通り教えたところだ。誠君は理解力に優れてて、教えるのが楽だったよ」
「いや……ははは」
誠が照れ笑いを浮かべてる。んー、私奴隷が褒められるのは、主（あるじ）としても嬉しいわね。まあ、これだけの良作だもの、当然だけど。
ただ気持ち悪いのは……私が喜んでいるのを見ながら、目の前にいる張りぼて水風船こと妖精学者（フェアリードクター）がニコニコと笑ってるのがね……なんなのよ、その笑顔は。
「それでね……誠君から彼のお姉さんの話を聞いたんだけどさ」
ん、なんかその話……聞きたいような聞きたくないような。なんでだろう？　誠のことだから興味あるけど、誠の本当のお姉さんの話って……んー、まあどちらにせよ、私の意志は関係なく勝手に保護者が話し始めてた。
「彼のお姉さんは彼が七歳の時に、モンゴルで亡くなったそうだ。死因は落馬。事故死だな」
「えっ、モンゴルで？」
さすがに私は、この話に思い切り食いついた。テーブルに小さな身を乗り出し、詳しい話を急かす。
「それも北側の地方だったらしい。つまり、ボリヤド民族のいる地方だな」
それって……つまり、私達モー・ショボーの故郷でって事？
「本当なの？」
問いかけは、二人の男達に投げかけた。二人共が、首を縦に振る。
「お姉ちゃんの事……モー・ショボーの話は全く知らなくて……ボクが天道寺さんに聞か

れるまま答えたら、なんか、そーいう事らしくって……」
「そーいう事って……どーいうことよ」
判っていながら、私は尋ね返す。そんな……だって、ねぇ？
「君の前世は、彼のお姉さんだった可能性が……かなり濃厚だって事だ」
くらっと来た。めまいというか……なに、この感情。ショック？　ううん、ショックはショックだけど……嬉しいの？　いえ……うーん、なんだろう……なによ、これ、なんなのよ。
「でも……私は……モー・ショボーなのよ。前世とか、関係ないわ」
そう、関係ない。全く……全く、関係ない。私達モー・ショボーは、愛を知らずに死んだ女の子が変化した妖怪。生まれ変わった際、私達は前世……人間だったときの記憶は一切失う。記憶の問題だけでなく、もはや妖怪なのだから……人間だった頃のことは、もう、関係ないのよ。そう、全く関係のないことなの……。そうやって自分に言い聞かせるのが、なんか悲しくなってきた。
「でもやっぱり……ボクにとって、お姉ちゃんはお姉ちゃんだ」
誠がまっすぐに私を見ている。やだ……そんな目で見ないでよ。私は、もうあなたの姉じゃないんだから……もう？　もうって何よ……そう、そうよ。別に確かな証拠のある話じゃないし……だって、今更……。
「ま、認めるとか認めないとか、真実がどうとか、気にしなくていいだろう」
コイツ……私がこれだけ動揺してるってのに、なに軽ぅく言っちゃってんのよ。ムカツクわ。保護者名乗るなら、もうちょっとそれらしく接しろ！……ていうか、なに動揺してるのよ私……。
「誠君は君のことを姉と思い慕っている。それは君と出会ってからのことであり、今回のことが判ったから彼が慕い始めたわけじゃない」
慕ってる……の？　まあ、うん、そうね……シスコンでロリコンの誠が、私を慕うっていうか、まあ、そーいう目で見るのは別に、うん、判らなくもない……わよ。
「君は君で、誠君が誰であれ、「可愛い客」なんだろう？　特別扱いしたくなるほどの。なら別に、過去がどーかは気にする必要はない」
なら初めから話さなければ……いや、知らせてくれたからちょっと……あーもう！　なんなのよ、もう！
「いいよね？　ボク、このままお姉ちゃんをお姉ちゃんって呼んでも……」
「もー、あー、いいわよ！　勝手に呼びなさい！　誠は誠で、その……ね、私にとっては、なに、その、さ……そう、弟みたいに可愛い奴隷、うん、そーいうことだからさ……はい、これで良いでしょ？」
なんなのよ……まったく、このビア樽野郎！　ニッコニコしてんじゃないわよ！　誠もなにその……うん、可愛い笑顔で……うん、そりゃ私もさ……うん……。
「まあ関係ないとは言っても、俺としては……ちょっとクランの「偽装住民票」とかを作るのに、誠君のお姉さんの名前を借りたいんだ。誠君には了解をとったけど、クランも別に構わないだろ？」
「あーはいはい。もう、好きにして良いわよ」
別に今更そんなもの必要じゃないけど……保護者としては色々あると便利なんでしょ？

もう、勝手にしてよ……。
「オーケー、なら決まりな。クラン、君の日本名はこれから「鳥羽愛」になるから」
「ちょっ、なに、「愛」って!?」
コイツ……これか、お前がずっとニヤついてたのはこれか！　よりによって愛って……愛を知らないモー・ショボーの名前が愛ですって？　なんの冗談よ！
「ダメ、流石にそれは却下！」
「おいおい、好きにして良いって言ったのは君だろう？　誠君も愛お姉ちゃんの方が嬉しいってさ」
「いや、あはははは……」
そこで誠を引っ張り出すな！　もう、そんな笑顔されちゃ……うー、なんでよ、なんで私、こんなに誠の笑顔に弱いのよぉ！　なんか、色々狂ってるわ……もう！
「……ブラコンめ」
ぼそっと、でも聞こえるように、ニヤついたオークが言い放つ。それを聞いた私は、椅子の上に立ち頑固親父よろしくテーブルをひっくり返していた。